
愛 > 恋 > 好きの物語

mkun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛>恋>好きの物語

【Nコード】

N5342A

【作者名】

m k u n

【あらすじ】

高校生の雅夫が銀婚式を迎えるまでの物語です。第一部0・さやかさんへのラブレター1・みほと雅夫の小学校、中学時代2・自衛隊のイラク派遣3・雅夫の文化祭第二部4・雅夫のマラソン大会とみほの文化祭第三部5・初めてのデートここまでは、完成。【その後の予定。未完成。】6・みほととの別れ7・さやかさんとの出会い8・みほの結婚9・雅夫の結婚10・銀婚式

愛＞恋＞好きの物語 - 第一部 - みほの文化祭まで（前書き）

「愛＞恋＞好きの物語」は、高校の生徒向けに、2年前から書いてきたものです。

少し書いては生徒に配り、を繰り返してきました。

多少、修正しましたが、話が時間的にいったり、きたりするの、そのためです。

ごめんなさい。

愛>恋>好きの物語・第一部・みほの文化祭まで

【プロローグ】

愛と恋と好きの違いってなんだろう。よくわからない。
不等式「愛>恋>好き」

気持ちの度合いの違いだろうか。違う気がする。

「してはいけない恋」という表現はある。

しかし、「悪い好き」と「正しい好き」はない。

人を愛するという事はどういう事なのか。

正解にはたどりつけないだろうが。あえて、この問題に挑戦してみよう。

雅夫は2004年に高校に入学する。

その雅夫が22才になった時から、物語は始まります。

雅夫は農学部の子年生。浪人している。

2009年に磐梯山が噴火し、その森林への影響を調査する為に、北関東の山岳地帯にでかけた。

【2010年9月さやかさんへのラブレター】

なつ は すぎ

きのう につこう の せんじょうがはら へ でかけた

すすきが かぜ に ゆられて とても きれい だった よ

そよ ふく かぜ は さわやか で

その かぜ の よう に さわやかな きみ

つかまえ よう と しても つかまえ られない

みずうみに まっしろな ふね が うかんで いる

それが あわく あかねいろ に そまって いく

あついなつもおわり
ゆうひのそまりかたもやさしくなつていた
ぼくのころもそうかもしれない

どれだけのときがすぎさつてしまつたのか
どれだけのときがすぎていこうとしているのか
でもしっかりとそまつているよ
きみへのおもい　あわく　あかく

ゆうやけつてあかだけではないんだね
ちへいせんにふれるところはあかそして　だいたい
にじのよう　きいろ　きみどり　あお
さいごはこんぺきのうちゅういろ

きみのことをかんがえながら
そらにはほしがかがやきはじめ　ときのながれ
はとまる

いきをしているのはきみとぼくだけ
ちいさなほし　おおきなほし　たくさんのほし
おおくのじだい

ぼくはおもう
きみがこのほしにうまれてくれて　よかった
このときにうまれてくれて　よかった
ほんとうによかつた・・・

さやかさんは昨年、短大を卒業して一流商社のOL2年生。二十二歳になつたばかりである。

9・11の後遺症はまだ、残っていて、06年から日本の人口が減り始め、ゆるやかな不況が続いている。

が、かえって、それだけに一部の会社は忙しい。

入社2年目だというのに、さやかさんが9時まで会社に残っている事はめずらしくなかった。

雅夫は大学生だが向こうは働いている。

それに商社というのは残業が多い。気兼ねして電話もなかなか、かけにくい。

手紙を出してから、会うまでに、何週間かの間があった。

もちろん、それがさやかさんとの初めてのデートではない。

さやかさんと出会ってから、2年の月日がたっていた。

雅夫はさやかさんがいる事だけでよかったと思っている。

この気持ちは、愛なのか、恋なのか。そして、・・・

話は一端、2005年にさかのぼる。

女の子との初めてのデートは、雅夫が高校2年の時だった。

相手は、みほという名前の物静かな女の子だった。

なんでさやかさんは「さん」がつくの、みほにはつかないのか。

【幼なじみの みほという女の子】2005年。雅夫、高校2年生。

なんでみほさんでなく、みほなのか。8年来の幼なじみだからである。

みほは小学校3年の時に転校して来た。髪はショートカットでボーイッシュな女の子だった。

以来、8年の幼なじみである。だが、単なる幼なじみではない。

小学校の時の雅夫の学年は1クラスだけで、クラス替えは一切なかった。

毎日毎日4年間、一緒。遠足も一緒。

さらに、雅夫の家からみほの家まで100m足らずである。

だから、夏休みだって、意図せずに会ってしまう。

父親の顔は知らないが、母親とは顔見知りである。

運動会の時は雅夫の学年だけ、1クラスを赤組と白組に分けた。

同じ組に入ればいいなと思った事もあるかもしれないが、

小学生の「好き」って、あの子も好き、この子も好き、その子も好きというレベルで、

恋や愛とは違う。

小学校の高学年ではよくあるように、この頃は雅夫よりみほの方が強かった。

中学は3クラスだった。

同じクラスになった事はなかったが、1日1回ぐらいは顔を見ていただろう。

boyishは小学校とともに卒業して、みほも段々と女性らしさを増していたのだろうが、

この頃は何の感情もなかった。

幼なじみの中の1人にすぎなかった。

中学1年の秋、ニューヨーク911が起きる。

この事件は亡くなった5000人の方だけでなく、多くの人の運命を変えたが、

この事件が後々、雅夫とみほにも影響を及ぼす。

そして、この二人の「愛」なのか「恋」なのか、なんだか分からない物語は2005年から、

みほが他の人と結婚するまで、5年以上も続くのである。

世界は騒々しかったが、雅夫の中学時代は何事もなく過ぎ、

二人は別々の高校に進学していった。

みほは女子校へ、雅夫は男子校へ。

【1年さかのぼって、まだ幼なじみの2004年。高校1年】

二人はともに電車通学だったので、帰りに駅で出会っ事があった。家が同じ方角なので一緒に帰った。10分ぐらい。

雅夫は山岳部に入っていた。

「今度の夏の合宿は1週間かけて南アルプスを縦走するんだって。荷物は1人、30kgだって、先輩が言っていた。」

「へえ、雅夫君には似合わないわね。」

他の友達も例外なく、同じ事を言っていた。

1年生の頃の雅夫はちよつとマラソンが速いぐらいで（1500m 5分ぐらい）、

筋肉はほとんどついていなかった。

「私の高校は毎週礼拝があるのよ。」

「みほさんはクリスチャンではないよね。」面と向かつては「さんをつける。」

「うん。でも全員参加するの。」

みほの学校はミッシェン系で、物静かなみほには、とっても似合っていた。

「じゃあね。」

小学校の時のように、自然に、二人は別れていった。

6月、イラクに暫定政府ができる。

しかし、イラクもアフガンも治安は悪化するばかりだった。

【2005年の初めてのデートの2ヶ月前。雅夫の文化祭9月20日】

05年7月25日、とんでもない事が起きた。

イラクに派遣された自衛隊の駐屯地に迫撃砲が撃ち込まれたのである。

あと半年後にはイラクの正式政府ができ、自衛隊も撤退するはずだった。

3人の自衛隊員が亡くなった。二人は20代で、残りの一人がみほの父親だった。

みほの父親が自衛隊員だという事はこの時、初めて知った。

それで、父親の顔を見た事がなかったのか。

小学校の友達と一緒に通夜に行った。誰も何も話そうとはしなかった。

高校2年生である。世の中の事はそこそこ知っている。こうなったのは、2001年の911が原因だ。

あの事件がきっかけで、アメリカは1ヶ月後にアフガンを空爆し、2003年、イラクに侵攻する。

日本は武力攻撃には参加しなかったが、その支援はした。

そんな事はみんなが知っていた。

みんな、それなりに考えは持っているだろう。でも、誰も何も話そうとはしなかった。

みほの父親に対しての政府の保障は手厚くされるだろう。

でも、もう、遅い。みほの顔はまともに見れなかった。

ただ、夏休みが1ヶ月残っているのが、唯一つのすきだった。

2005年は、戦争が終って60年目なので、例年になく、戦争をTVがとりあげていた。

8月。6日（広島）、9日（長崎）、15日（終戦）。

これまでは、なんとなく、そんな時代もあったのかなあと漠然と思っただけだった。

しかし、身近な人の父親が亡くなって、60年前も今も同じなんだという事がつきりした。

9月になると文化祭の季節である。

家は近くだが、あれ以来、一度も会っていない。

みほはどうしているのかな。

小学校3年から、8年もたっていて、お互い空気のような存在である。

だから、雅夫に気負いはなかった。でも、ためらいはあった。

何だかんだ言っても、思春期の男の子である。

思い切って、文化祭の招待券を送った。

こうして、地球の裏側のニューヨークの事件は雅夫とみほの人生に影響を及ぼしていくのである。

次の日、メールではなく、電話があつた。

「ありがとう、雅夫君。私は元気よ。20日には必ず行くわ。」

これまでのように物静かなしゃべり方なので、本当に元気になったかどうかは分からなかった。短い言葉だったけど、雅夫の気持ちは少しだけ晴れた。

20日。校門で待っていると、みほが歩いてきた。

物静かだけど、ステキな笑顔で言った。

「ありがとう。雅夫君。」

この頃のみほの髪型はセミロングになっていた。元気そうだった。

「今度は私の高校の文化祭に来てね。だけど、私、文化祭実行委員長だから忙しくて、

なかなか相手してあげられないかもしれないけど。」

「うん。僕も学校のマラソン大会とぶつかっているけど、午後には必ず行くよ。」

聞いてみると、クラスではなく、学校全体の実行委員長と言う。みほの性格には合っていないと思ったが、小学校の頃はboyishで活発な女の子だった。

よく、雅夫もいじめられた。

中学の時はクラスが別で、あまり話す機会は多くなかったけど、いつから、変わったのだろう。

中学1年の時は小学校と同じ明るさがあつた。

一瞬、雅夫の体に電撃が走った。

そうか、テロ特措法ができて、自衛隊がアメリカの支援を始めた頃だ。

たしか、中学1年から2年にかけての事だ。

そうだったのか。

自分の気がつかないところで、そんな事があつたのか。

これからも自分の知らないところで、いろんな事が進んで行くのかもしれないな。

「これ、後で読んでみて。」

別れ際に渡されたのは『中原 中也』の詩集だった。

雅夫に詩集の趣味はなかったが、この時点での彼女の心境を考えれば、

「僕に詩集の趣味はない。」とは言えない。

みほが帰ってから、しおりのはさんであつた所を開けてみた。

汚れちまつた悲しみに

いたいたしくも怖気づき

汚れちまつた悲しみに

なすところなく日は暮れる

・・・この詩の意味する事は雅夫には分からなかった。

でも、高校2年の女の子にふさわしいとは思えなかった。

表面的には明るく振る舞っていても、まだ、2ヶ月足らずだから。

少しでも、みほの支えになってやりたいと思った。

歌も映画もリバイバルが流行っていた。

たいがい、30年前のものだ。

そのひとつに「小さな恋のメロディ」という映画があつた。

映画はまだ見ていなかったが、その主題歌は知っていた。

曲名は「FIRST OF MAY」 by ビーギーズ。

【小さな恋のメロディの主題歌FIRST OF MAY（若葉の頃）by ビーギーズ】

この歌は雅夫とみほの関係を象徴している。

*クリスマスツリーとの大小が逆転するような長い年月。 Now we are tall

く 幼い時から、雅夫はみほを好きだったようである。

*壊れてしまった恋。 The day I kissed you r cheek and you were gone

く 高校生の雅夫とみほの恋のようなものは数ヶ月で終わる。

*でも、二人の愛はなくなるらない。 Our love will

never die

くでも、雅夫の愛のようなものは何年も続く。

恋と愛。恋のようなものと愛のようなもの。

「あなたが好き。」と言った時、それは愛なのか恋なのか。それとは別なものなのか。

やっと2005年の初めてのデートなのですが。

この歌が二人の運命と奇妙に重なっている事に、雅夫はまだ気づいていなかった。

【台湾新幹線開通】 2005年10月の新聞から。これは、フィクションです。

台北から高雄までの全線345kmを90分で結ぶ。運賃は飛行機代の6割の安さ。

導入車両は、JR東海の「700系のぞみ」改良型で、最高時速350km。

車両以外の信号・コンピュータシステムなど、すべて、日本のものが使われる。

最初、車両を含むシステムは、価格面から欧州勢が（ドイツ、フランスの欧州高速鉄道連盟）

圧倒的優勢にあった。

それで、受注はほぼ確実とみられていた。

しかし、性能や安全面から日本の新幹線を見直す意見が台湾内で強まり、

大逆転で日本に受注が決定した。

ヨーロッパの高速鉄道は事故が多発している。

最大のものは、1998年、ドイツの高速鉄道、

インター・シティ・エクスプレス（ICE）の脱線事故である。

時速200キロで走っていた高速列車が脱線し、死亡した犠牲者は102人にのぼった。

日本では、三島駅で高校生が指をはさまれて、ひきずられ亡くなった死亡事故だけである。

中越地震で脱線しても死亡者はいなかった。

韓国ではフランスのものを導入した高速鉄道（最高時速300km）が2004年営業を開始している。

【初めてのデートの前のみほの文化祭の前日。11月2日】

雅夫は「世界最速の日本の新幹線が台湾新幹線に抜かれた。」というニュースを見て、思った。

日本の技術が世界へ広がるのは良い事だ。どこが一番でもいいではないか。

去年のオリンピックに日本男子バレーは出場できなかった。

しかし、クイック攻撃、時間差など、すべて日本が開発したものだ。平和の祭典オリンピックでもイラク戦争は中止されなかった。

そして、9月の雅夫の文化祭の時の事を思い出していた。

雅夫の所属する山岳部は展示を行っていた。

山の装備、ピッケルやアイゼン。過去の部誌などを置いていた。

山岳部の部誌は1年間に行った山行の記録や山に関するエッセイなどを

1、2年の部員が手分けして書く。

ただ、3年生は何を書いても良いというルールがあった。

アメリカがイラクに侵攻した03年の部誌には3年生が、

そのアメリカの攻撃に関する文章を書いていた。

半分ふざけた書き方なのでみほには見せたくなかった。

やっと、みほに明るさが出てきた時である。

しかし、2年生の雅夫には、先輩をさしおいて、それを予め隠しておく事はできなかった。

「この部誌もらえないの。」とみほが言いながら、その部誌を手に取りうつとした。

みほは詩でも小説でも文章を読むのが好きである。

「高校生の書いた文章って、興味があるわ。」

「これは、1冊しかないし、僕が高校に入る前の先輩たちが作ったものだから。」

先輩達の書いている事はもつともだが、みほに見せるわけにはいかない。

「こっちの去年作ったものなら、たくさんあるからいいよ。」

「雅夫君の書いたものもあるの。」

「モチロン。ダカラ、コツチノヲ アゲルカラ、ヨンデミテ。」

みほは04年度の部誌を手にした。

「雅夫君の目の前で読むのはやめておくわ。感想は後でメールする。」

ということと事無きを得た。

みほが見なかった先輩の文章その1

【月の裏側のUFO基地での会話】 3年生が書いた03年度部誌より

「銀河連邦地球監視団の団長として、この60年間の地球人の行動について、

連邦総会に重要な報告をしなければならない。

はつきり言って地球人は我が銀河連邦に大きな脅威を与えている。

60年前、核爆弾を開発し、使用したばかりか、いまだに保有し、新たに開発もしている。

35年前には月にロケットを飛ばし、今や、太陽系外にまで到達するロケットを開発しようとしている。

ま、温暖化対策や地球人同士の戦争に多大な費用がかかるから、そう簡単にはいかないだろうが。

とにかく20年後には、月や木星の我々の基地を発見し攻撃をしかけてくるかもしれない。」

「まったく、同感です。」

これまで、地球人の思い上がりを正すため、我々の宇宙船を飛ばし、宇宙標準の高貴な文明があることを示唆してきました。

にもかかわらずに、野蛮で攻撃的な地球人は、いつこうに考えを改めません。」

「平和的手段では限りがあるという事を報告書に書いておこう。」

「平和的手段ですか？チエリノブリの原発に細工して、核の恐ろしさを地球人に再確認させたのは団長のペンタゴン星ではなかったのですか。」

「何を言っておる。チャレンジャーに細工をして宇宙開発を遅らせようとしたのは君のKGB星ではないのか。」

「仲間割れをしている場合ではありません。」

レノン星のように、Give Peace A Chanceなどと言っていると、地球人の脅威に対抗できません。」

（平和にチャンスを与えよ。1969。）

「そうだ、過去の我々の行為はどうでもいいのだ。ならずものが住む現在の地球が問題なのだ。」

地球に対する武力攻撃を銀河連邦総会に進言しよう。」

「攻撃範囲はどこにしますか。」

悪の枢軸国、アメリカとロシアと中国にピンポイントですか。」

「いやいや、それだけでは心配だ。」

イギリスとフランスとインドとパキスタンとイスラエルとイラクと北朝鮮と。」

リビアとイランも危ないな。ついでにドイツと日本も加えとけ。」

「つまり地球総攻撃ですね。」

しかし、連邦同盟条約9条に

『宇宙開発にあたっては同盟に加盟していない低文明の惑星の生命を尊重し』

という条項があったと思いますが。」

「君は不勉強だな。」

それには但し書きがあつてな。

『ただし、同盟に加盟する惑星の生命・財産に脅威がある場合は除く』

と書いてある。」

「全く不勉強でして、我々の高貴な文明に財産という概念があるのを初めて知りました。

確か、レノン星の曲に

『Imagine no possessions (財産) I wonder if you can』

というのがありましたね。」

「レノン星の曲は全面禁止だ。

しかし、4光年離れた連邦本部に報告書が届くには我々の高貴な文明をもつてしても、4年かかってしまう。

それでは遅い。

連邦本部には事後報告するとして、ただちに総攻撃の準備をせよ。」

「たしか、さきほど20年後の脅威について、おっしゃっていたと思います。」

「うるさいことを言うと、逮捕するぞ。早くショックカノン砲の用意をしろ。」

「監視団の団長は攻撃軍の司令官も兼ねていたのですね。」

月の裏側のUFO基地の外壁が白く塗られていたのは言うまでもない。(山田 太郎)

みほが見なかった先輩の文章その2

【謹んでアメリカ国民に進言する】3年生が書いた03年度部誌より

60年前、日本はハワイの真珠湾を攻撃しました。

それは、良い事ではありませんが、我が方にも少しの理由はあったのです。

ただ、その攻撃はアメリカ本土に対してではありませんし、貴国を

占領しようとしたわけでもありません。

真珠湾にいた貴国の軍艦を沈没させようとしただけで（その時、亡くなられた貴国の兵隊さんはお気の毒だと思いますが）ホノルルの病院や学校を爆撃したわけではないのです。

だいたい10日もかけてハワイまでたどり着いた我が空母部隊に余分の戦闘機や爆弾はなかったのですから。

その攻撃に対して貴国は

「リメンバー パールハーバー（真珠湾を忘れるな）」

を合い言葉に日本憎しの感情で一致団結しました。

そして、アメリカ国民を戦場には送らないと公約したルーズベルト大統領も戦争を決断しました。

そして、東京（3月）沖縄（5月）広島・長崎（8月）だけでなく日本全土を破壊つくしました。

また、先祖が日本人の貴国国民を幽閉しました。

その事について原因は我が方が作ったのですから、ここでは非難はしません。

8月15日に、我国が受諾したポツダム宣言の最後を貴国は

『これ以外の日本の選択は迅速かつ完全なる破壊あるのみ』と結んでいます。

ここまで貴国を怒らせたことを反省するのみです。

また、同宣言の中で

『我らは日本人を民族として奴隷化しようとし、または、国民として滅亡させようとする意図を有するものではないが、』

と、わざわざ、ことわって、我が国の国民が誤解しないようにとの配慮をしていただきました。

さてこの度、貴国の大統領はイラクを攻撃しようとしています。

貴国の大統領であっても、無実のイラクの国民が死んでいくのを快く思っていないだろうとは想像します。

まさに『貴国の大統領はイラク人を民族として奴隷化しようとし、

または、国民として滅亡させようとする意図を有するものではない。

」
と思います。

また、戦争をする多くの理由があることも理解しています。

（テロ支援の疑惑・大量破壊兵器の保有・クルド人へのいじめ・油田の利権・アメリカ兵器の優秀さの誇示など）

また、テロ攻撃はアメリカだけに向けられたものではなく、全世界の国民をテロ攻撃から守るんだという

（飢えに苦しむ人やチエチエンやチベットやパレスチナで弾圧されている人も含めて）

高貴な正義感も理解しようと努めています。

確かに9・11の後、フセイン大統領は「これはアメリカの自業自得だ」というような事を言いました。

しかし、テロリスト、あるいはテロ支援者はバクダッドの宮殿の中だけにいるのでしょうか。

大量破壊兵器はどこに隠されているのでしょうか。

さがすのは大変困難だと思います。

60年前のハワイ攻撃で我が機動部隊は貴国の空母を発見、撃沈できなかつたために、

もう一度、ミッドウェー海戦をするはめになり、さらなる犠牲者を出しました。

今回のイラク攻撃もそんなことになりはしないかと心配です。

また、我々の歴史の経験からして、

『リメンバー バクダッド』の合い言葉がアラブ・イスラム世界に広がるのではないかという事も心配です。

首都を攻撃し占領するのであれば、その恨みは真珠湾の軍艦の比ではありません。

さらに、貴国の昔の理屈をまねして、ビン＝ラディンが

「我々の同胞、聖戦の兵士の犠牲を最小限にする為には、ニューヨークの核攻撃もしかたない。」

と言つかもしれません。

ついでにイラクに眠るメソポタミアの遺跡にも配慮願います。

60年前、貴国が我が国の京都、奈良に配慮してくださったように。

全世界でどんなに反戦デモが起きようと、貴国の大統領は考えを改めるつもりは無いように見えます。

一応、貴国は民主主義の国です。大統領の意志を変えられるのは貴国国民しかありません。

最後に、選挙で選ばれた大統領の決断とその結果は、全てその国民が負うのだという事を想起するようご忠告します。

たとえ、ブッシュ大統領が独裁者フセインだけを標的にしても、ビンラディンは貴国の大統領だけをねらうのではありません。

（佐藤 次郎）

「これは、1冊しかないし、僕が高校に入る前の先輩たちが作ったものだから。」

先輩達の書いている事はもっともだが、みほに見せるわけにはいかない。

「こつちの去年作ったものなら、たくさんあるからいいよ。」

「雅夫君の書いたものもあるの。」

「モチロン。ダカラ、コッチノヲ アゲルカラ、ヨンデミテ。」

みほは04年度の部誌を手にした。

「雅夫君の目の前で読むのはやめておくわ。感想は後でメールする。」

「ということでは事無きを得た。」

【1年生の時の山の思い出】雅夫の書いた04年度部誌より

1年の夏休みに南アルプスに行った。

静岡県から入って、3000m近い山の稜線上を1週間かけて、山

梨県にぬける計画である。

慣れない登山靴で、初日から、かかとにマメができた。

2日目、マメがこすれないように、かばいながら歩くが、それでも皮は破れる。

3日目になると、むき出しの肉がこすれる。

つらいのは朝の2時間。我慢して歩いていると、痛みに慣れ、段々感じなくなる。

5日目の夜、先輩達が次の日の行程を相談していた。2日分の行程を1日で行こうというのである。

ただただ怖かった、この時は。

さて、1年の友達は荷物が神経を圧迫したのか、手が肩から上に上がらなくなっていた。

6日目、2日分の行程なので、暗いうちに出発する。午後、木が全くない所で雷の音を聞くが、無事到着。

（長野の高校生が登山中に落雷に打たれ数人の生徒が亡くなるといふ事件があった。）

私のかかとのマメは肉が削れて、信じられない事に、クボミができている。

最終日は裸足で歩きたい気分であった。

家に帰ってみると、リンパ腺がはれていた。

新しい皮はなかなかできず、1ヶ月の夏休みの間中、サンダルで過ごした。

今でもそのあとが残っている。

9月の末頃に回復したので、性懲りもなく丹沢にでかける。今度は1人。

（良い子はマネをしてはいけません。）

土曜の午後から出かけたので、泊まる予定の山小屋についた時は暗くなっていた。

ところが、その山小屋は閉まっていた。

土曜なら開いているだろうと、事前の確認を怠ったのだ。

さらに、小屋までは2時間ぐらいで着くからと、水を持っていなかった。

あたりには人は誰もいない。真っ暗な中、とりあえず次の日の昼食を食べてしまう。

ドラム缶に溜まっている水を飲んで一夜を明かそうかとも思ったが、幸い（というか山では常識）懐中電灯は持っていたので次の山小屋まで行くことにする。

ちよつと歩くと、ドサツと前のめりに倒れてしまった。

体が冷えて両足が一度につつたのだ。つりやすい体質は体力がついても変わらない。

ここは標高1300mだから、平地より気温が8度ぐらい低い。

本来なら、ここで引き返すべきなのだが、1年生の初心者はそのなこと、思いもしなかった。

次の山小屋も閉まっていたら、どうするつもりだったのだろうか。この時は1時間ぐらい登った所の小屋が開いていて事無きを得た。

【みほからのメール】

「雅夫君の書いたもの読んだわ。危ない事はしないでね。」

実は4ヶ月後、雅夫は死と直面する。

みほが先輩の文章を読もうとした時はドキドキした。

明日はマラソン大会とみほの文化祭だ。早く寝よう。ワクワク。ソワソワ。

みほと会うからワクワク。ソワソワ。なのではない。

この時点で雅夫のみほへの思いは「好きか嫌いか」と聞かれれば、もちろん嫌いじゃないから「好きだ。」と答える程度。

あくまで、幼なじみの一人。

ワクワクの原因は雅夫がマラソンが好きだからだ。

1年の春のマラソン100番、秋のマラソン30番、2年の春のマラソン10番。

そして、秋のマラソンなのだ。・・・だから、ソワソワ。

第一部終わり

第二部は「みほの文化祭の日。11月3日【から、始まります。

愛>恋>好きの物語・第二部・初めてのデートまで（前書き）

第一部のあらすじ

大学生の雅夫が書いたさやかさんへのラブレターから、始まる。

話は一端、時間をさかのぼり、幼馴染のみほととの出会い。みほの父親の死。雅夫の高校の文化祭。で終わった。

愛>恋>好きの物語・第二部・初めてのデートまで

【初めてのデート・・・の前のみほの文化祭の日。 11月3日】

秋のマラソンは50kmなので、7時半学校集合で、スタートが8時である。

よって、朝5時に起きる。外はまだ、暗い。

1年の春のマラソンは10kmで、ほとんど最後尾からのスタートだったから、

細い道で1000人近い生徒を追い抜くのに関がかり、100番だった。

1年の秋は35km地点で足がつり、その後、歩いたり走ったりで30番だった。

2年の春は、3年生にまぎれ込んで先頭からスタートし、10番だった。

今回は一桁が目標である。

去年、山岳部の2年の先輩は完走して10番だったから、完走が必要条件である。

ただ、先輩が言うには完走すれば、十分、10位以内に入れるとは限らないらしい。

山でも、息は苦しくないのに、足がつる事が良くあった。

そういう体質なのかもしれない。つらない事が最低必要である。

という事で、朝はでんぶん質のご飯と、果物を食べた。

果物が「つり対策」に効果があるかどうかは、雅夫の知識では分かっていなかったが、なんとなく、そうした。

途中のエネルギー補給と「つり対策」におにぎり2個と、みかん1個を持っていく。

給水所は5km毎にあるが、スペシャルドリンクなどはない。必要なものは個人が腰に巻き付けて走る。

去年のかかとの傷は完治していたので、バンドエイドは持っていない。

マメができれば、完走はあきらめるだけだ。

（エイドaidは助けるだから、バンドエイドは傷の治りを助けるバンドという意味かな。）

学校から出発地点までぞろぞろと、20分ぐらい歩く。スタート1分前から、秒読みが始まる。

心臓はドキドキ、アドレナリンの分泌が高まっているのだろうか。

20km地点は40番で通過した。

35km地点まで来ると、上位の者でも歩き始める者が、ちらほらるので、30番に順位が上がった。

去年はこの辺で足がつったが、その兆候はまだ、なかった。

疲れてはいるが、みほのことを考えて走っている訳ではなかった。

山の事を考えながら走った。

【男には、大切な人と大切なものが同時に存在する事がある。

普通の女には分らない。「私と　とどっちが大切なのよ。」とか言う。

「それは、君の方が大切さ。でも、こっちも大切なんだ。」

なんて、説明ではたいてい納得してくれない。

そんな事が原因で、20年後、雅夫は離婚の危機を迎える。

相手はみほとは別人の洋子さん。】

来年の3月には北岳に登るんだ。これぐらい、なんて事はない。

冬山では40kg以上の荷物がある。今は空身だ。

利根川の橋にかけての上り坂。ナンダサカ。コンナサカ。

コンチキシヨウ。コノヤロウ。マツタク、モウ。ブツブツ。アーア。

高橋尚子はエライ。

悪態をついたのが災いして、後7kmという所で、やっぱり、来てしまった。

また、歩いたり、走ったりで結局24位だった。

ゴールは小学校の体育館で、ほとんどの者が寝っ転がって休んでい

る。

待機しているだけなのか、校庭には白い救急車が止まっていた。山岳部には寝つ転がって休む習慣は無かったし、雅夫には、大事な約束があった。

トン汁を食べ終わると、近くの駅へ歩き始める。帰りは電車だ。疲れてはいたが、この時は何ともなかった。

50kmというと電車で1時間ぐらかかる。

そのうちに、体が冷えてくる。電車を降りると、たいてい階段がある。

アツルツル。階段にバナナの皮があったわけではない。

足をひきづりながら、みほの高校に着いた時は、2時を過ぎていた。

「今、赤いレンガの校門。」

「すぐに行くから、まってね。」

5分ぐらいして、みほが現れた。

疲れ切った雅夫にはみほの笑顔はマリア様のようだった。

「遅かったから、心配したわ。昨日、救急車の夢を見たの。」

みほの目がうるんだようだったが、

みほはくりりと振り返り、雅夫を見ずに校舎の方へ歩き出した。

「大変だったでしょ。50km。」あわてて、雅夫も後を追う。

足をひきづらないように努力して。

「いや、そんな事ないよ。走るの好きだし。3月に登る北岳に比べれば。」

雅夫は本当にそう思っていた。しかし、

（天の声）高校生の女の子からすれば、そこまでして来てくれたことに感激していたかもしれないね。

雅夫は気づいていないようですが。

（ノ天の声）

「山、気をつけてね。」

「大丈夫だよ。」

「父も、そう言っていたわ。もう、悲しい思いはこりこりだわ。」

(シユン) 気まずい沈黙の時間が流れた。
(なんとか、この空気を打開しなくては)

「実行委員長の方はいいのかい。」

「今は何も仕事ないんだけど、3時から、後夜祭があるの。それが終わるまで、待っててくれる。」

「うん、いいよ。校門の所で待っている。」

【文化祭の帰り道】

校内を一緒にまわったが、女の子ばかりだった。

みほの高校は女子校で、校門で一人で待っているのは恥ずかしかった。

1時間ぐらいして、みほが来た。二人の女性と一緒にだった。

一人は高校生ではないようだった。

「私の幼なじみの雅夫君です。こちらは、同級生の洋子とお姉さん。大学の仏文科の2年生で、いろんな事、教えてもらっているの。」

(こういう時は、最初に、年上の人に向かって紹介するのが礼儀である。)

みほの上品さは雅夫に欠けている点だった。

洋子さんのお姉さんも上品そうで、きれいな人だった。

赤いレンガをバックに、ひまわりの花がプリントされたワンピースがまぶしかった。

みほの高校は駅から遠いのでバスに乗らなくてはいけない。

洋子さんとお姉さんも同じバスに乗った。電車に乗り換えた後は二人だけになった。

電車は空いていたが、二人で並んで座るのも気恥ずかしく、立っていた。

「洋子のお姉さん、きれいでしょ。」

「うん、何といいましょうか、みとれちゃいました。」×××

「アノ、みほさんは、アノ、子どもの頃から見ているから。」

「いいのよ、別に。私から見てもきれいだもの。頭もいいし、あこがれちゃう。素敵な女性だわ。」

「本当に素敵な女性ってメツタにいないんだよな。」xxx

「アノ、いや、そういう事ではなくて。」ウフフ。

「私も素敵な女性になるから、雅夫君も素敵な男性になつてね。マラソン大会、24番で残念だったわね。」

「今度は来年の5月だ。目標はメダル。」

「雅夫君はなんで、山とかマラソンとか好きなの。」

「よく分らないんだけど、マラソンのゴールって遠いじゃん。

山の頂上も遠いんだ。雪山だと3000mの山頂まで3日も4日もかかる。」

雅夫はそこからは見えない山を想像しながら言った。

（山の話になると、みほの事は忘れてしまう。女は私だけを見てと言う。）

その気持ちも分かるけど、男の気持ちも分かってくれないかなあ。）

「まだ見えない遠い所。だから、無理してでも行きたい。」

「無理は絶対ダメツ。まだ見えない遠い先。私は素敵な女性になっているかしら。

無理してでも、素敵な女性にならなくっちゃ。あつ、そういう無理はいいのよ。」

前に座つて、二人の会話を聞いていたおばさんが笑った。

「いいわね。お二人さん。若いって。」

そう言つて、おばさんはヘッドフォンをはずしながら、電車を降りて行つた。

みほは舌を出しながら、言った。

「ヘッドフォンをしているから、聞こえていないと思つていたのに。降りる駅が同じでなくて良かった。」

二人は顔を見合せて、笑った。

そういう上品でない仕草もみほがすると、かわいかった。

そんなことがあつて、秋は深まり、二人の関係も徐々に深まってい

くのでした。

【恋のキューピット】

翌日は二人とも代休で休み。二人は何をしていたのでしょうか。そして一日おいた、翌々日の学校からの帰り、雅夫が電車を降りると、

偶然にもみほがいた。
同じ電車だったのだ。

「おとといは恥ずかしかったな。」
「そうね、びっくりしたわ。」

（天の声）

さて、ここで「恥ずかしかった」と「びっくりした」という言葉は、全然意味が違うという事にお気づきであろうか。

実は (really, in fact)

『いいわね。お二人さん。若いつて。』と指摘された時、

みほは、それまで自覚していなかった自分の気持ちに気がついてしまつて、

びっくりしていたのである。

舌を出したのは、その照れ隠しだったのかもしれない。

（／天の声）

二人は以前のように遊歩道を家へと歩き始めた。

実際にものさしで測れば、二人の物理的な距離は近くなつてはいなかったが、

精神的距離は近づいたようだった。

「あのおばさん、ヘッドフォンしてたでしょ。何聞いてたか聞こえた？」

「疲れると聴力が落ちるからね。気がつかなかった。」

「ビーズよ。」

「ふーん。ぼくもビージーズの曲は聴くよ。」

「えっ。私、ビージーズ大好きなの。」

なんでだか、聞いていると、とっても落ちつくの。

小さな恋のメロディって映画、知ってる？

音楽はほとんどビージーズが作っているのよ。

もうすぐ終わっちゃうけど。」

と、みほは劇のセリフのように言った。

「FIRST OF MAYは知っている。映画の内容は知らないけど。」

「今日の日曜日どうかしら。小さな恋のメロディ。」

…という事で、おばさんはキューピットになってしまいました。

なんだか、話ができすぎているようですが、これはフィクションですから。」

（天の声）同じ電車だったのは偶然かどうか、怪しいですよ。

ヘッドフォンからビージーズの曲が聞こえてたのも。

雅夫が「ビートルズじゃないの。」と答えても

「ビージーズもよ。」と答えればすむし、

たとえ、雅夫がビージーズを知らなくても、

映画を見に行くという結末にたどり着くストーリーを作るのは簡単だ。

頭の良い女の子が、1日、考えておけば。単なる推測に過ぎませんがね。

（／天の声）

Leaves have not fallen. An
d they have not fallen in
love, yet.

11月初めの遊歩道にはまだ、落ち葉は早く、
二人が恋におちいるにも、もう少し時間が必要だった。
ただ、みほはその予兆を感じているようだった。

「じゃあ。今度の日曜日。」

以前のように、自然に、二人は別れていった。

たぶん、この段階では「好き」が最もあてはまる。

2週間後には「恋」かもしれない。

そして、2年後には「好き」でもない。

「恋」でもない。

「愛」のようなものになるのである。

（5月にメダルをとった。しかし、その時、みほはそばにいない）

【2005年の初めてのデートの前々日。11月8日】

朝。雅夫は駅に向かって歩いていった。

歩くというより、早足に近い。しかも、息を止めて早足で行く。

（あと、少し、あの電柱まで。）

息を大きく吸い込むと、また、息を止めて歩く。

（次はどこを目標にしようか。）

冬が近づくと、このトレーニングを始めるのであるが、

今年はその開始時期が去年より早い。みほが原因だろうか。

しかし、まだ、雅夫にそういう自覚はなかった。

駅の改札口の手前30mぐらいの所で、雅夫は前を歩くみほを見つけた。

朝の駅で、みほと会うのは初めてだった。

みほは、駅員に向かって何かをしゃべり、頭を下げた。

雅夫は走って、みほに追いついた。

「はあはあはあ。今、何を話していたんだい。」

「あら、雅夫くん。ただ、お早うございますって言っただけよ。」

「知り合いなのかい。」

「名前も知らないわ。」

でも、私がお早うございますって言えば、あの駅員さんも気分がい

いでしょ。

それで、あの駅員さんが二人の人に親切にすれば、その二人の人は気分が良くなるでしょ。

そして、その二人の人が、4人の人に親切にするでしょ。」

「分かった。それが10回繰り返されると、2の10乗だから、1024人だな。」

「そんな単純な計算にはならないと思うけど、

女子高生のかわいい笑顔は相当な力を秘めていると思うわ。」

「日本には女子高生は100万人はいるから、 1024×100 万で10億人だ。」

これは、日本だけでなく世界を変える力になるかも知れない。」

「だから、それは単純すぎる計算だけど、そうなってくれると、うれしいわ。」

それが、みほができる平和への小さな願いなのかもしれない。

「雅夫くんこそ、真っ赤な顔をして、どうしたの。」

「毎日、駅まで、息を止めながら歩いてるんだ。」

「それ、山のため。」

「うん。12月中はコートもセーターも着ないし。」

「それも山のため。」みほがムツとした表情で言った。

そんな、みほの表情は初めて見たので、雅夫はビックリした。

「いけないかなあ。」

「いけないはいけど。もういいわ。そんな事。電車が来たわ。」

そこで、この会話は途切れてしまったが、雅夫の頭には何か奇妙な感じが残った。

電車は高架になっているので、遠くに秩父の山々が見えた。

「雅夫くんが行こうとしているのは、あそこに見える山？」

「いや、もっと遠くの、もっと高い山。今頃は雪が積もっているかもしれない。」

そう言っ、雅夫は何か後ろめたさを感じた。

何年後かにはヒマラヤの山にも行ってみたいと、思っていたが、

それは言っではいけない事のように思えた。

【『小さな恋のメロディ』という映画について】

朝のSHRが始まって、さっきの奇妙な感じは残っていた。

みほと見る事になって、『小さな恋のメロディ』を昼休みにインターネットで調べて見た。

公式サイトも個人的なサイトもたくさんあった。

（天の声）みなさんも、調べてみてください。（ノ天の声）

個人的なサイトの半分くらいは、35年前に初めて公開された時に見た人のものであった。

TVでも、放映されたし、DVDでも発売されていて、それを見た人のもあった。

これは伝説的な作品らしい。当時のティーンに絶大な支持を得たみたいだ。

内村光良が、笑う犬の生活の中で、「この映画は14歳までに見なさい」と言っていたらしい。

この映画は純粋な恋のメルヘン。

子供達の立場で描かれ、大人達をこけにしている。

（天の声）

『大人は、子供の頃の事を、時々思い出すこと。』

（ノ天の声）

多くの大人は忘れてしまっている。

汚れた大人の心を浄化させてくれる。

（天の声）後々の雅夫とみほの現実世界に関わる映画の重要な場面ダニエルとメロディーは学校を出て、墓地に行きます。BGMは「若葉の頃」。

二人は墓地に座り『リンゴ』をかじります。メロディが二つの墓石の言葉を読みます。

奥さんの墓石に書かれている言葉。

『ここに最愛の、美しきエラ・ジェーン眠る。妻であり生涯の友でありしもの。』

50年にわたる幸福に感謝をささげる。1893年7月7日永眠。』

旦那さんの墓石に書かれている言葉。

『ヘンリー・ジェーン。妻エラ・ジェーンのもとに逝く、1893年9月11日。』

M「奥さんが死んでから2か月しか生きていなかったのね。」

D「死ぬほど愛していたんだよ。」

M「本当に愛し合っていたのね。ねえ50年も愛せる?」

D「大丈夫、もう1週間も愛しているもの。」

(／天の声)

第二部終わり

第三部は【初めてのデート】から、始まります。

初めてのデートの終わりまで

愛>恋>好きの物語・第三部・初めてのデートの終わりまで

【初めてのデート。11月10日。映画館まで
前日のメール。

「ちよつと、寄る所があるので、待ち合わせは有楽町の数寄屋橋で、
3時にしよう。」

雅夫

2時、雅夫は銀座6丁目にいた。洋書の専門店イエナにいくためである。

英語の先生が「楽しく英語を勉強するには英語で書かれた小説を読むのが良い。」

それも、日本語で一度読んだものが良い。

銀座にイエナという洋書の専門店がある。何万冊もの英語の本があるぞ。」

と、おっしゃっていたのを思い出したからである。

雅夫はみほとは違って純文学には興味はなかったが、SF小説は大好きだった。

『The ape of planet 猿の惑星』がいいかな。
ape"しっぽのない猿（ゴリラ、チンパンジー）。

高校2年生も半分が過ぎ、受験勉強をしなくてはいけない。

公認会計士になるのが雅夫の夢だった。

会計士のテレビドラマを見たのがキツカケだった。（単純）

また、会計士というのは高収入を得られるというのも魅力的であった。（不純）

それで、調べてみると、会計士になるには商学部がいらしい。ということ、3年は文系のクラスを希望していた。

さて、英語の先生に書いてもらった地図を手を持っているのだが、

見つからない。

50m先のマツキヨに入って、聞いてみると。

「イエナは1年ぐらい前に閉店になりましたよ。」と、教えてくれた。

しょうがないので、ソニービルで時間をつぶす。

2時55分。数寄屋橋までは100mだ。人混みの中にみほがいた。

「みほさーん。」雅夫は手を振りながら、みほのところへ走った。

「まった？」

「今、来たところよ。雅夫君って、まわりを気にしないのね。」

「えっ。何が？」

「手を振って名前を呼んだことよ。でも、恥ずかしさより、うれしさの方が勝ってるわ。」

探していた本は見つかった？」

「イエナの店じたいは閉鎖されていた。インターネット販売に移行するんだって。」

「そうね。洋書なんて、在庫をたくさん用意しておいても、なかなか売れないものね。」

「インターネットで思い出した。この映画、インターネットで調べてみたんだ。」

そしたら、たくさんのサイトがあった。

たいていは、33年前に初めて上映された時に見た人の感想だった。

「

「最近、リバイバルが流行っているわね。」

「実は、この数寄屋橋は50年前の『君の名は』というラジオドラマで有名になったんだ。」

それが最近、NHKでリメイクされた。」

と言ってしまつて、まづかったかなと思い、

「話しは変わるけど、この前、映画化されたタッチも、

少年サンデーに連載されたのは24年前だ。

だから、25才以上で『みなみ』という名前の女性はいないんだ。」

「詳しいのね。」

「全部、インターネットで得た知識さ。」

「へえー。あら、もう時間よ。」

（天の声）

『君の名は』というドラマは昭和20年の東京大空襲の夜、偶然、数寄屋橋で出会った男女が、半年後に再会を約束する。

しかし、二人は運命に翻弄される。すれ違いの悲恋の物語である。

そこまで。雅夫は知っていたが、

『戦争』という言葉は、みほの前では禁句だったから、タッチの話しにすり替えたのである。

（／天の声）

【初めてのデート。11月10日。映画館の中】

映画館の中はそんなに混んでいなかった。

ロンドンの小学校。ガキ大将のオーンショーと気の優しいダニエル君がいた。

二人は大の仲良し。

そんなある日、二人は体育館で女の子たちがバレーの練習をしているのをのぞき見る。

ダニエル君はその中の女の子、メロディちゃんに一目惚れ。

彼女のことを思い浮かべて走ったら、運動会で1位になった。

それを知った親友のオーンショー、友情を発揮するのはこの時とばかり、キューピットの役をかってでる。

しかし哀しいかな、メロディちゃんは反応なし。

でも、本当はメロディちゃんもダニエル君が好きだったんだ。

それが女心というものか。

そんなこんなで、ダニエル君とメロディちゃんは墓地でデート。

二人で手をつないで歩いている。そこに夕立が。

ダニエル君とメロディちゃんは翌日、学校を休んで海岸に遊びに行く。

（良い子はまねをしてはいけません）

砂浜でトンネルを掘ったり、二人でアイスクリームを食べたり（小学生だからね）

それはそれは素晴らしい一日でした。

でも、翌朝ふたりは校長に呼び出され、説教をされる。

そこで、ダニエル君は宣言する。「僕たち結婚します」メロディちゃんもうなずく。

さあ、大変。大人達は大混乱。

「なぜなんだ。一緒にいたいから結婚したいだけなのに。」

教室に戻ったダニエルを、オーンショールを筆頭にみんながからかった。

（良い子は恋をからかいの対象にしてはダメ。本人は真剣なのです。）

それで、気の優しいダニエルも、ガキ大将のオーンショールにとくみあいのけんかを挑んだ。

その後、オーンショールはダニエルに謝る。

そして、「二人を結婚させてやるんだ。」と心の中で誓い、結婚式の準備を始める。

昼休みが終わっても、生徒達は教室に戻らない。

先生たちが騒ぎ出す。頭の固い先生たちは二人の結婚式を許す訳がない。

二人は結婚できるのか。たわいのない話だが。

みほ「心臓がドキドキしてきたわ。」雅夫は無言。

ガード下の空き屋で子供達だけの結婚式が開かれていた。

オーンショールが牧師。そこへ先生達が侵入してきて大騒ぎ。

オーンショールは花嫁と花婿をトロツコに乗せる。

ダニエルとメロディの二人は花咲く野原をまっすぐに、どこまでも……。END。

【吊り橋効果】

（天の声）好きな人といると、ドキドキする事がある。

また、映画やサッカーの試合を見ている時にドキドキする事がある。この二つのドキドキの原因は全く別のものだが、人間の脳はそれを混同してしまう事がよくある。

これを心理学用語で『吊り橋効果』という。

『吊り橋効果』というのは、次のような実験からきています。

200人の男性を二つのグループに分け、

一つは高さ50mの揺れる吊り橋を、もう一つは、高さ1mの頑丈な橋を渡らせます。

どちらのグループも、橋のまん中で一人の女性に幾つかの質問を受けます。

渡り終わった後で、女性に対しての印象を聞くと、吊り橋を渡ったグループの男性は女性に好意を持った人が多かったという結果が出ました。

ということ、二人でジェットコースターに乗るのは、ある意味、理にかなった行為なのです。

また、二人で美しい景色を見るのも良いでしょう。

景色の美しさと相手の美しさと誤解してしまうのです。

恋は誤解から始まる。だって、そうでしょう。

雅夫がみほに恋をして、太郎が花子に恋をする。

太郎はみほに恋をしていない。

この時、「みほが世界で最高の女性だ。」と、思っているのは雅夫だけです。

つまり、それは絶対の真理ではなく、誤解です。

さらに言えば、その誤解をといて、

「みほが世界でただ一人の女性である。」

という事を絶対の真理にする長い道のりが、愛なのかなと思います。親子の愛はかなり最初から真実ですが、他人への愛は真実にしていくのだと思います。

（／天の声）

【映画館の外へ。日比谷公園】

さて、映画は終わった。時刻は夕方。映画館の外へ出ると雨。というより、30分後にはやんでいたから夕立。しかし、11月に夕立は変だ。

とにかく、二人ともカサは持ってきていない。

（映画のストーリー。ダニエル君とメロディちゃんは夕立の中を手をつないで歩く）

この時、映画のストーリーをはっきり意識していたかどうかはわからない。

が、気がつくと二人は手をつないで雨の中を小走りに日比谷公園の方に向かっていた。

それは全くの自然の状態だった。

日比谷公園につくと、雨はやみ、夕焼けの中に、うつすらと虹がかっていた。

とても美しい景色だった。二人は無言でそれを見つめていた。

（天の声）

ここで視点を二人の後に移して見ましょう。

夕焼けは真っ赤ではなく、オレンジ色です。

そのオレンジ色をバックに手をつないだ二人のシルエットが黒く浮かびます。

夕立後の風は大気をふるわせ、かげろうのようにそのシルエットがゆれます。

そのふるえは、何か、二人の運命のはかなさを感じさせます。

うつすらとした虹の色が、いくらか濃く、あざやかになります。

それは、二人の明るい未来を示しているのでしょうか。

映画ならここで、I kissed your cheekなのかもしれないが。

（/天の声）

公園の入り口の看板が二人を現実世界に引き戻した。

『思い出ベンチ事業』

雅夫が読んだ。

『この公園のベンチは一般の方々の寄付によって設置されており、寄贈された方のメッセージがベンチのプレートに記されています。』

「何が書いてあるのかしら。」

二人はベンチを探した。

『私たちはこの公園で出会い、結婚しました。はるき まちこ』

「この方達、おいくつぐらいかしら。」

「ベンチ一基25万円って書いてあったから、20代ではないだろうね。」

「もっと、ロマンチックな話できないの。」みほが笑顔で怒った。

「じゃ、精一杯の努力をして。」

雅夫はつないでいた手をはなし、ハンカチでベンチのしずくを拭き始めた。

「すわろうか。」

「ありがとう。」

「映画の墓地の場面を思い出しているんだ。」

「私もよ。」

「あの墓地の夫婦は70歳ぐらいで、ほとんど同時になくなっただろ。」

このベンチの夫婦もあなるんだろうか。」

「そして、私たち二人は…？。でしょ。」

「あはは、同じ事を考えていたか。」

「実はね。『君の名は』の二人は、戦争で離ればなれになっちゃったんだ。」

「知っていたわ。リメイクされたドラマ見たから。」

それに触れようとしなかった雅夫君の気持ちも分かっていたわ。

でも、良かったのよ。ちゃんと言ってくれて。私たちは逆のケースよ。

父の死は日本のためになったの？それが分かるのは、きっと何十年

後ね。

でも、日本のためになったと、今、言つて欲しいの。」

雅夫とみほの間に刺さったトゲは抜けたかのように思われたが。

「戦争があつた事を忘れてはいけないし、

平和のように見えても戦争があるという事を知らなくてはいけない。

でも、戦争のない世界なんて、来るんだろうか。」

「そこで、あきらめたら、ダメッ。」

みほが、2日前とおなじように、ムツとした表情になった。

「ごめんなさいね。みんな、そう言うわ。でも、それじゃだめなの。」

「

みほのほほをひとしずくの涙が流れた。雅夫は何も言わずに、みほの手を握った。

「雅夫君が悪いんじゃないの。」

でも、この気持ちが消えるには、きっと何十年もかかるんだわ。」

雅夫は何も言えなかった。

2日前の奇妙な感じが分かつてきた。

二人の間には、なかなか越えられない壁がある。

二人は当事者とその幼なじみという関係だった。

みほの父親と直接会ったことはなかった。

雅夫は大きな壁をはつきり意識したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342a/>

愛 > 恋 > 好きの物語

2010年10月28日07時40分発行